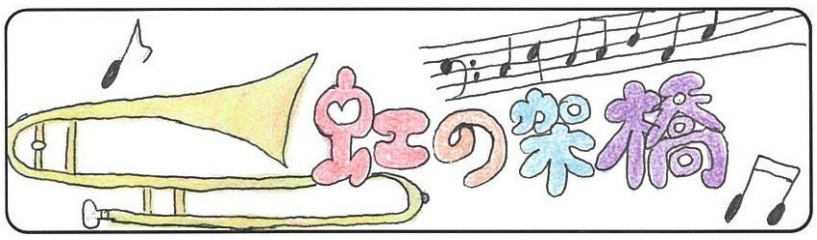
虹の架橋は足利屋・さくらもーるアスクが毎月１日発行する地域新聞です



第３６６号

令和８年２月１日発行
企画・編集　松﨑　靖
発行　㈱足利屋洋品店
みどり市大間々町4-1380（〒376-0101）
TEL０２７７－７３－１２１２
Fax ０２７７－７０－１０６６

今月の題字
下井夏希さん
（みどり市大間々町）

1月に成人式を迎えた大間々南幼稚園事務主事の夏希さんはいつも笑顔。みどり市誕生の年に生まれ、山田郡時代を知らない最初のみどり市新成人です。

創生落語とお楽しみ落語会
三遊亭円楽・楽麻呂・萬橘競演

百年後まで語り語り継ぎたい地域の歴史を落語仕立てにして三人の真打落語家が語るという「みどり市創生落語」が始まって十年。今年は、創生落語とお楽しみ落語会の二部構成で開催いたします。

出演は、去年の全国芝居小屋会議ながめ大会の前夜祭で、七代目襲名披露興行を行った三遊亭円楽さんと三遊亭萬橘さん。そして、毎年の創生落語で大間々にもファンが多い三遊亭楽麻呂さんです。

3月15日13時半開演（13時開場）
ながめ余興場　木戸銭500円
（みどり市・桐生市の学生は無料）

創生落語の演目は、みどり市東町で生まれ育ち「うさぎとかめ」や「金太郎」の童謡を作詞して「童謡の父」と呼ばれた「石原和三郎物語」を三遊亭楽麻呂さんが語り、明治２８年の大間々の大火の際に醤油醸造の岡商店が蔵の醤油８５石（１升瓶８５００本）を使って火を消し止めた感動のエピソードを落語にした「大間々あきんど物語」を三遊亭萬橘さんが面白おかしく語ります。そして最後は、水のなかった笠懸の地に渡良瀬川から水を引いて岡登用水を作り、村の発展の基礎を築いた「岡上景能物語」を七代目の三遊亭円楽さんが語ります。

先月号の虹の架橋の題字を書いてくれた円楽さんとの再会も楽しみです。前売券は足利屋にもあります。

小耳にはさんだ いい話
（文責・靖）
《366》

認知症グレーゾーンからUターン

北九州市の高山昌瑛さんが発行している情報紙で『認知症グレーゾーンからUターンした人がやっていること』という興味深いタイトルの本が紹介されていたので早速読んでみました。著者は筑波大学名誉教授でメモリークリニックお茶の水院長の朝田隆先生。認知症治療を専門とする朝田先生は、「認知症になる人は、その前段階として必ず、グレーゾーンの状態を通るのですが、全ての人が、グレーゾーンから認知症に移行するとはかぎらず、４人に１人は健常な脳の状態にUターン（回復）できることがわかっています」と書いています。認知症は、もの忘れなどの「記憶力」の衰えに意識が向きがちですが、その前に訪れるのが「意欲」の低下で「めんどうくさい」という言葉を頻繁に口にするようになったら黄色信号だそうです。この本の中では、認知症グレーゾーンから認知症に進行する人とグレーゾーンからUターンする人の違いや、Uターンするための生活習慣や運動習慣や食習慣、睡眠習慣などが細かく記されています。生活習慣としては、「年相応」ではなく「年甲斐もない」ことに挑戦し、ドキドキするような刺激を求めて新しいことにチャレンジをする。人との交流を深め、自分の事より他者のために力を尽くすボランティアのような活動を続けていると幸福度が高まっていくそうです。

近年、認知症に対する治療は飛躍的に進み、画期的な薬が日本でも承認されることが決まっています。

今から百九十八年前、越後国で千五百人以上の人が亡くなるという大地震が発生した際、曹洞宗の僧侶の良寛さんは「人として生まれたからには生老病死からは逃れることはできない。私たちは、災難もあるがままを受け入れ、その時自分ができることを一所懸命やるしかないのだと説き、家族を亡くした人に「**災難に逢う時節には災難に逢うがよく候。死ぬ時節には死ぬがよく候。これは災難をのがるる妙法にて候**」という手紙を送ったそうです。朝田先生はあとがきの中で「ボケる時にはボケるがよろし」と思って、可能なかぎり予防法に努めることが妙法だと思います」と結んでいます。

この本を読んで少し気持ちが楽になり「面倒くさい」と言わないことに決めました。

世界一小さな足利屋 トイレ美術館

今月の絵《366》
オノサト・トシノブさん

美術の教科書にも出ていた画家・オノサト・トシノブ（小野里利信）さんは桐生市に住み、戦後、シベリアに抑留され、足利屋先代の松崎福司らと生死の境を彷徨った経験があります。昭和二十五年から大間々中学校の美術教師となり「絵くらいは全部の子に良い点をやりたい」と言っていたそうです。七十四歳で亡くなった後、奥様の智子さんが「オノサトトシノブ伝」を出版するために足利屋に何度かお越しになりシベリアの話を聞いていたのを思い出します。十三年間休館していたオノサト・トシノブ美術館は一昨年から再開しています。

靖ちゃん日記

令和8年1月15日（木）

今夜はM幼稚園の役員新年会だった。新年会続きだが「乾杯の数だけ人生が楽しくなる」。A園長は「少子化時代だが当園は園児数が増えています」と胸を張った。園長や先生方の努力が実ったと嬉しく思った。S市長は「みどり市は今まで転出超過だったがこども未来施策の効果で前年比250人も増えました」と報告してくれた。

今日の参加者は13人のうち女性が4人。日頃の付き合いの気安さでお酌に行ったが逆に飲まされた。みんな虹の架橋を読んでくれている。S市長は「私もやっちゃん日記が楽しみです」と言い、Hさんは「やっちゃん日記は一番最後に読みます」と言い、Iさんも「やっちゃん日記の下ネタが一番大好き」と言っていた。最後に「シメのご発声を松崎さんに…」と指名され、大間々伝統の「七のシメ」の説明をしてから全員揃ってきれいに締めた。今日のやっちゃん日記は下ネタではなく「シメネタ」だった。

雪晴れや赤城山頂電波塔

上州人にとって山といえば赤城山。特にみどり市から見た景色は、上毛かるたの「裾野は長し赤城山」そのものです。赤城山という単体の峰はなく、黒檜山、駒ケ岳、地蔵岳、鈴ヶ岳などの連山の総称を赤城山と呼んでいます。

雪晴れの日、みどり市から眺める赤城山は最高峰の黒檜山の左手に雪を被ったなだらかで美しい形の地蔵岳が見えます。その山頂には、ＮＨＫやＴＢＳや国土交通省の雨量観測電波塔などが確認でき、私たちの日常生活を陰で支えてくれていることがわかります。

❤やっちゃんの似顔絵提供：ひさかさん

虹の架橋 ⇑ 検索 で、インターネットからでもご覧いただけます。

第三百六十七号は令和八年三月一日（日）発行予定です。